



こどもと一緒につくる

～変わり続ける年間指導計画～

1年生 奈良女子大学附属小学校 伊藤 志穂

1. はじめに

図画工作科の時間は「こどもそのもの」を認め、「こどもの事実」に立ち会うことができる幸せな時間だと感じている。

児童がもてる力をどのように発揮し、資質や能力をどのような道筋で伸ばしていくのか、年間指導計画作成のあり方について考察した。

当初の年間指導計画は試案と考えて柔軟に見直すこと、教科の目的を達成するための題材と題材のつながりを考えること等、資質や能力を育てる年間指導計画のあり方について考えたいと思う。

2. 実践の概要

【題材名】

「①すなあそび → ② いっしょにおさんぽ」
A表現(1)ア(2)アからA表現(1)イ(2)イへと続く題材

【目標】

- ①・砂の触った感じを全身で捉える。
 - ・いろいろな形や触った感じなどを基に造形的な活動を思い付き、感覚や気持ちを生かしながら、どのように活動するかについて考える。
 - ・砂に進んで触れながら、思い付いたことをどんどん試す。つくりだす喜びを味わう。
- ②・手や体全体の感覚を働かせ、表したいことを基に表し方を工夫して表す。



- ・楽しい散歩と一緒にいきたい仲間や様子を思い浮かべて、どのように表すかについて考える。
- ・つくりだす喜びを味わう。

3. 活動の内容・方法

- ①砂場で遊ぶ。全身で砂に関わっていけるように十分な時間を確保する。
- ②楽しい散歩を思い浮かべながら、粘土で、表情や動きを工夫して表す。



4. 成果と課題

砂で造形遊びをする活動を児童が満足いくまでしっかりとやりこめば、手や体全体の感覚を働かせて粘土で造形する姿へと続いていくことが分かった。砂の造形遊びから立体に表す活動へ連続した学びを設定することは確かな力を付けることにつながり、児童の満足感も高まるように感じた。今回、予定していなかった彩色を取り入れることにしたのは、児童のつぎやきがきっかけであった。

見直しをもって立てた指導計画であっても、児童がつくりだす喜びを味わう授業をめざすのであれば、児童の声や様子を受け止めて柔軟に見直す必要がある。こうして見直し続ける指導計画は1年の終わりに学びの履歴として残る。それを次学年（他の担当者）や学校全体でどう共有していくのかも検討していきたい。